

2010 年度報告書（研究員）

氏 名	田村 早苗
職 位	GCOE 短時間研究員
<p>研究概要</p> <p>本年度は、主に（１）因果・目的を表す言語表現についての研究、（２）日本語の名詞化表現（連用形を用いた名詞化、形式名詞コトを用いた名詞化）、（３）因果関係の種類とその言語における表現方法についての言語的・哲学的研究 を行った。</p> <p>（１）は報告者の個人研究として進められたもので、学会予稿集に論文を発表するとともに、フランスの IHPST で行われた意味論に関するワークショップ、および滋賀県大津市で行われた自然言語における推論表現に関する科研ワークショップで研究成果の報告を行った。また、10 月に九州大学を訪ね、同大学の上山あゆみ准教授と研究成果の検討および今後の研究の方向性について会議を行った。</p> <p>（２）、（３）は、原由里枝氏（香港市立大）、金英周氏、酒井弘氏（ともに広島大）との共同研究として進められた。（２）の研究成果についてはオックスフォード大学で行われた国際学会 (Japanese/Korean Linguistics 20) ほか、（３）については 7th Workshop on Altaic Formal Linguistics (University of Southern California) ほかで発表を行った。発表の内容は既に論文としてまとめられ、同学会の Proceedings に投稿済みである。また、（３）に関しては先行研究を概観したサーベイが『京都大学言語学研究』に掲載されている。</p> <p>これらの研究に加えて、沖縄・宮古島の言語調査データの収集・整理作業にも携わった。報告者は主に、収集されてきたデータの整理、調査機材の管理などを担当した。また、9 月に本大学で開かれた宮古島方言に関するワークショップに参加し、当該方言の研究状況について、現地調査を進めている研究者たちと情報交換を行った。</p>	
<p>業績リスト（著書、論文、報告、その他に分けて主要なものを記入する）</p> <p>論文</p> <p>S. Tamura, Y. Hara, Y. Kim, H. Sakai. 'Types of causal relations: a survey' Kyoto University Linguistic Research 29. pp.153–170.</p> <p>田村早苗 (2010) 「タメニのための様相論理」 Proceedings of Kansai Linguistic Society (KLS) 30. pp.215–226.</p> <p>学会発表</p> <p>Hara, Kim, Sakai, and Tamura. 'Japanese sentential nominalization and different kinds of causation', the 7th Workshop on Altaic Formal Linguistics, USC, Oct. 29–31.</p> <p>Hara, Kim, Sakai, and Tamura. 'Semantic realization of the layered TP: Evidence from the ambiguity of the sentential <i>koto</i>-nominal', Japanese/Korean Linguistics 20, Oxford U., Oct. 1–3.</p>	

